

夏目漱石の漢詩研究  
-連作と「断面的文学」という視点から-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 雪梅 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/20259">http://hdl.handle.net/10291/20259</a>

2018年12月13日

## 「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 政治経済学部 専任教授

氏名 池田 功 ⑩

(副査) 経営学部 専任准教授

氏名 畑中 基紀 ⑩

(副査) 農学部 専任教授

氏名 松下 浩幸 ⑩

(副査) 法学部 専任准教授

氏名 小財 陽平 ⑩

1 論文提出者 崔 雪梅

2 論文題名 夏目漱石の漢詩研究—連作と「断面的文学」という視点から—

(英文題) A study of Natsume Soseki' s Chinese poetry -From the Perspective of Series and “Cross-sectional Literature” -

### 3 論文の構成

凡例

序章

一節 問題意識と目的

二節 『文学論』と「断面的文学」

三節 『草枕』と「断面的文学」

四節 「文芸の哲学的基礎」と「断面的文学」

五節 「俳句的小説」と「低徊趣味」

六節 考察視点と独創的なところ、本研究の意義と位置づけ

七節 先行研究—漱石漢詩の注釈

八節 先行研究—小説漢詩の挿入と引用

九節 各章の概要

注

第一部 連作として読む

第一章 前期の漢詩

一節 はじめに

二節 詩人の反骨精神と原郷

三節 「木屑録」と「断面的文学」

一 「木屑録」に関して

二 海水浴場と写実的な空間描写

三 幻想的な空間描写と理想的な空間描写

四節 「望郷」と「離別」

一 連作として読む「望郷」の詩

二 連作として読む「離京」の詩

三 事実上の離京と漢詩の創作

五節 まとめ

注

第二章 後期の作品

一節 はじめに

二節 絵画創作期の漢詩と「断面的文学」の絵画的要素

一 絵画創作期（前期）—「春日偶成」十首

二 絵画創作期（後期）—題画詩

三節 最晩年の作品

四節 まとめ

注

第二部 「断面的文学」という漢詩

第三章 「詩入」作品と「俳句的小説」

一節 はじめに

二節 『思ひ出す事など』と漢詩

三節 『虞美人草』と漢詩

一 甲野欽吾の「日記」と漢詩

二 甲野欽吾の「日記」

四節 『草枕』と「俳句的小説」

一 『草枕』の漢詩

二 「俳句的小説」という創作方法

三 「俳句的小説」という概念が提出された時代背景

五節 まとめ

注

第四章 『草枕』における漢詩的な空間構造

一節 はじめに

二節 交通機関に関する題材

- 一 【船】—「舟」
- 二 【船】—「帆」
- 三 【汽車】
- 四 【駅】
- 三節 ひび割れた世界—「舟」と「船」
- 四節 まとめ
- 注
- 第五章「古別離」
- 一節 はじめに
- 二節 「古別離」の訓みくだし
  - 一 「不贈貂檐褕、却報英瓊瑰」
  - 二 「欲遺君子佩、蘭渚起徘徊」
- 三節 「古別離」の注釈と翻訳
  - 一 張衡「四愁詩」
  - 二 「古別離」の注釈
  - 三 「古別離」の翻訳
- 四節 まとめ
- 注
- 終章 結論
- 参考文献

#### 4 論文の概要

小説家や英文学者として有名な夏目漱石（1867～1916）であるが、その49年の生涯で208首の漢詩を詠んでいる。本論文では、その漢詩を漱石が名づけた「断面的文学」という視点から分析する。この「断面的文学」とは、漱石の『文学論』（明治40）や評論、談話や小説などに記されているが、絶えない意識の流れの中の断面的な意識の内容を文字化、文芸化したものである。このことは具体的に『文学論』で「吾が邦の和歌、俳句若くは漢詩の大部分の如きは皆此断面的文学」とであると定義し、シェイクスピアなどの作品を取り上げながら説明している。

この「断面的文学」である漢詩を、ある一定の期間に集中的、継続的に創作した漢詩群を連作としてとらえ、それを第一部の第一章、第二章で取り上げる。そうではなく連続しない個別的な作品を、第二部の第三章から第五章で取り上げる。

第一部の第一章では、前期の漢詩（最初の作品からイギリスへ留学した明治33年までに詠まれた75番目までの作品）が対象とされるが、その中でとりわけ明治22年に脱稿された「木屑録」が中心である。これは房総を旅した時の漢詩紀行文であり、14首の漢詩が詠まれている。この「望郷」「離京」を主題として作られた漢詩の中で、「故郷」のイメージが連続しており長編詩のような作風になっていることを指摘する。この「故郷」は客観的世界として実在する故郷であり、また思想と精神上の原郷でもあるとする。そして連作として読む時に、「故郷の喪失→離郷→原郷を訪ねる」という文脈が読みとれるとしている。

第二章では、漱石の後期の漢詩（76番から最後の作品）が対象とされる。漱石は明治43年に

伊豆の修善寺で大量の血を吐き生死の境をさまよった後、東京に戻ってから一時中断していた漢詩を再び詠み始める。その漢詩の中に、官職を退いて静かに生活するという「帰臥」というイメージが、前期の漢詩に見られるような論理的順序の保たれたつながりとして見出すことができるとしている。

第二部の第三章では、漢詩入り作品である随筆『思ひ出す事など』や小説『虞美人草』、『草枕』が対象とされる。『思ひ出す事など』に加えた16首の漢詩は、本文との内容上の一体感が得られ、また本文と互いに補足する形を構成し、さらに末尾に加えられているので結びの作用としても働いているとする。『虞美人草』の中の漢詩は、人物像を表す材料や、物語の展開を予告する伏線として作用しているとする。『草枕』の中の漢詩は、作品を展開する道具としての作用であると同時に、作品の風格を定める重要な材料ともなっているとする。また『草枕』の「プロットも無ければ、事件の発展もない」という創作方法は、従来「俳句的小説」と言われているが、「断面的文学」の表現方法を受け継いでいるものであるとする。

第四章では、『草枕』が対象とされる。この作品には「汽車」に対する文明論が記されている。それと同時に「汽車」と同じ文明の象徴であった「船」も重要な意味をもっているとするが、漢詩の中で大型の動力をつかった「船」の漢字は見あたらず、小型の手漕ぎの「舟」などが使用されるとする。とりわけ『草枕』の画工の視点から語られる「ふね」は、すべて「舟」と表記されるとし、「舟」で「非人情の天地」へ送る描写は、『桃花源記』と同じように漁夫を秘境へ送ると同じような、実在しない空間への拡張としての道具の役割を担っているとしている。

第五章では、明治32年に詠まれた、五言古詩の楽府詩である「古別離」が対象とされる。この漢詩は、後漢の張衡の男女の切ない離別の情を詠んだ名作「四愁詩」の言葉を多く引用しているということは、すでに先行研究によって指摘されている。そこで代表的な4冊の漱石漢詩の注釈書における、訓みくだしや注釈や現代語訳を比較した。その結果、とりわけ「金錯刀」「貂檐褕」「英瓊瑰」などの言葉の解釈や現代語訳に、先行研究とは異なる視点を指摘している。

## 5 論文の特質

夏目漱石研究は、日本近代文学研究の中でも最も多くなされていると言っても過言ではない。しかし、その漱石研究の中心は小説であり、漢詩に対してはあまりなされてこなかった。本論は、そのあまりなされてこなかった漱石の漢詩に正面から取り組んだところに、最大の特質がある。

その特質を具体的に記すと、まず第一に、漱石が『文学論』や評論などで記している「断面的文学」という視点から、漱石の漢詩208首や小説を論じたことである。この「断面的文学」から漱石の漢詩を論じた先行研究はない。そういう意味で大きな特質であると言える。

第二の特質は、とりわけ第一部の第一章と第二章に論じられているように、漢詩を一首ずつではなく、そこに語彙やイメージの連鎖があり、長編詩のようになっているということを論じたことである。第一章では、前期の漢詩作品の「木屑録」に、「故郷」のイメージが連続しているが、これは実在の故郷ばかりでなく、思想や精神上的の故郷でもあることを指摘した。第二章では、後期の作品であり、そこに官職を退いて静かに生活するという「帰臥」のイメージが連続し長編詩のようになっていることを指摘した。このような指摘は今までに無かった。

第三の特質は、『思ひ出す事など』や『虞美人草』、『草枕』の詩入り作品を丁寧に、また詳細に論じたことである。つまり、散文作品の中に入れられた漢詩は、作品全体とどのような関係にな

っているのかということである。『思ひ出す事など』では、漢詩は本文との一体感や本文を互いに補足する構成や結びの作用として働いているとし、また『虞美人草』では、人物像を表す材料や物語の展開を予示する伏線になっているとし、さらに『草枕』では、作品を展開する道具として作用していると指摘しているが、それぞれの特質を言い当てているといえる。

第四の特質は、後漢の張衡の「四愁詩」の言葉が多用されていることでも知られている五言古詩の「古別離」における、訓みくだしや注釈や現代語訳の先行研究の誤りを指摘したことである。とりわけ「金錯刀」「貂檐褕」「英瓊瑰」などの言葉の解釈や現代語訳に、異なる視点としての理由を指摘している。

以上の点が、本博士論文の大きな特質と言えるものである。

## 6 論文の評価

既に「5論文の特質」において、本博士論文の特質を記しているが、それはそのまま本論文の評価でもある。「断面的文学」としての視点から、漱石の漢詩作品を論じたことは今までなかった。また、漢詩を一首として論じるだけでなく、連続する言葉やイメージのつながりがあるものとして、連作、あるいは長編詩に近いものであるとして論じたものも今までなかったものである。また、漢詩入りの作品である『思ひ出す事など』や『虞美人草』、『草枕』も丁寧に論じ、さらに「古別離」を先行研究との相違をきちんと論じている。このような点は評価されるべき点である。

もっとも今後の課題がないわけではない。まず、日本語の表現に誤りがあるというわけではないが、多少わかりにくいところがあるかもしれないということである。また、「断面的文学」という定義について、漱石自身が『文学論』などでしか記していないこともあり、やや定義付けが弱いということがあるかもしれない。さらに言えば、同じ「断面的文学」であり、漱石もたくさん詠んでいる俳句について論じることがなかった。今回は漢詩に限定しているので特に問題はないのであるが、できれば今後の課題として論じてほしいものである。

## 7 論文の判定

本学位請求論文は、教養デザイン研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上